

シャルル＝フランソワ・ドービニー

～ バルビゾン派から印象派への架け橋 ～
山梨県立美術館 2018. 10. 20～12. 16



「シャルル＝フランソワ・ドービニー」(1817～1878)は、「コロー」の穏やかな気質に近く、数多く旅行して戸外での観察を重視して、水面に反射する光の明るさと色合いの表現に到達して、「戸外の風景画」の新側面を切り開いた。

画伯は「風景画」を多く描いたパリ生まれのバルビゾン系の画家とされるが、川を好んで描くなど「バルビゾン派」の枠に入り切れない要素が多いとされ、森などで作品を制作して以降、自身の所有する小型の舟上からも制作もした。

本展は、バルビゾン派をコレクションの柱の一つとする当館の開館40周年記念事業記念として、バルビゾン派から印象派の架け橋となった「ドービニー」の知られざる画業に迫る企画で国内初の展覧会として開催されている。

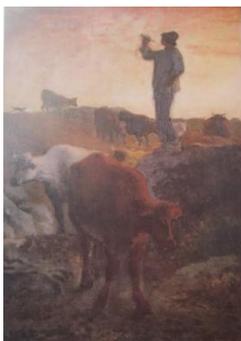
《オブトゥヴィオスの水門》 1856年

画伯は、風景画家であった父に幼い頃から絵のてほどきを受けて、各地を旅し芸術を学ぶ中で、自然を間近で観察してありのままに描くというスタイルを確立し、特に「水」に対する思い入れは深いことで知られ、“まるで自然を切り取って、そのまま額縁をつけたようだ”と評価されている。

大胆な筆使いそして時にパレットナイフを用いて表現された作品は、「印象」を描がいたものに過ぎない「未完成」な作品として、批評家たちから比喻される一方、眼前に広がる自然を喚起する魅力を備えた作品として評価された。

さらに、「水」とともに魅力的なのが「空」の表現でよく晴れた青空、夕焼け、どんよりした曇り空など、そのどれもが吸い込まれそうなほどの美しく、絵の向こう側の空気までも伝わってくるようである。

ジャン＝フランソワ・ミレー 《角笛を吹く牛飼い》 1850年代



当美術館は、《種をまく人》など「ミレー」の作品を70点もコレクションして常時展示していることで名高い。

今回、約100年振りに「特別展」として一般公開されて注目されている「農民画作品」は、パリ郊外の森の岩の上で牧人が牛の群れを角笛で呼び寄せている、色彩豊かな風景を中心に人物を描いた画伯の代表的な作品である。